

ソルボンヌ 一九七九年—一九八〇年

永治日出雄

新しいシーズンを迎えたオペラ座では、グノーの歌劇『ファウスト』が上演されていた。メフィストテレスに導かれて、若返った碩学が学生たちの盛り場に現れる舞台と旋律は、パリで生活を開始した私の心に、深く滲込んできた。中世の面影をとどめるカルチュ・ラタンを毎日のように往来しながら、私もまた青春の自由と情熱を取戻しつつあったからである。

悪魔との怖ろしい約束がないかわりに、ヨーロッパにおける私の滞在は、一年の予定にすぎなかった。文部省と大学から許された一年という長さは、留学の成果をあげるためにけっして充分ではないが、こうした機会を得ることすら、現在の勤務条件が続くかぎり、二度と期待できないであろう。この得がたく貴重な月日を、自己の学習や研究だけでなく、みずからの人生全体のため

に、いかにすれば、もっとも有効に用いるか、と私は思い悩んだのである。長くはなかったが、一九七八年にはじめてフランスに滞在したのを契機として、みずからの魂が根底から揺ぶられ、自己の意識と関心が、新たな方向へ進みはじめたことを私は感じていた。それは会話する能力が上達したり、知られざる文献を手ずることに比し、はるかに大切な事柄である。たしかに今回の出張における主要な課題のひとつは、十八世紀の啓蒙思想家エルヴェシウスの伝記的資料を蒐集し、彼の子孫によりいままも保存されている城館ヴォレを訪ねることであった。⁽¹⁾しかし、人々が在外研究員という言葉から推測するように、図書館での文献調査や教育施設の視察に没入することが私はできなかった。むしろ祖国と家族から離れた一日一日を、いわば自己形成の再開とみなし、ヨーロッパの文化と生活を無我夢中で把握しようとつとめたのである。こうして私は大学での授業や学術的な会合で、多くの学生・

研究者と接触するとともに、パリに存在する沢山の劇場・教会・博物館に足繁く赴き、さらには市井の雑沓に身を置いて、庶民の苦楽勞逸を観察することになった。

二

パリに到着したのは、彼岸を過ぎてまもなくであるが、サン・ミッシェル大通りやリュクサンブール公園のマロニエは、すでに黄金色に燃えていた。しかし、夏のバカンスはなかなか終らず、新しい学期がパリ大学で始まったのは、落葉の目だちかけた十一月である。発表された時間割を調べ、指導を受ける教授と連絡をとりながら、私はソルボンヌで大学院に相当するいくつかの授業を聴講するようになった。そのなかには学期の途中から参加したのもあり、後期は出席しないので終わったものもあるが、教育学に関する授業はひとつだけで、他は哲学や文学や史学の授業であった。研究課題とするフランス啓蒙思想が、たとえばルソーの著作のようにたんに学習と教育の問題に限らず、政治・社会・哲学・芸術など広汎な領域に及ぶことから、私は十八世紀文学やフランス革命史の演習にも手を伸ばした。しかし、こうした選択へと導く最大の原因は、フランスの大学における教育学研究の現状にあったといえよう。

私たちが異国に旅する意義のなかには、言葉や書物から造りあ

げた思込みを、事実と経験とによって修正することが含まれる。大学とか学界とかいう言葉をみれば、私たちは無意識のうちに、日本と同じような講座の編成・授業の形態・研究者の構成を想定する。けれども、フランスへの留学を準備する者は、教育制度の著るしい相違、とりわけパリ大学の複雑奇妙さに、だれしも困惑するにちがいない。

フランスの大学はすべて国立であり、首都にはパリ大学しか存在しない。一九六八年の五月革命のあと、パリ大学は十三に分割再編され、各々がほぼ独立した組織を有するにいたった。パリ第一大学（パンテオン・ソルボンヌ）から第五大学（ルネ・デカルト）までの施設の大半は、由緒あるソルボンヌ周辺に位置し、伝統的なアカデミズムの雰囲気か濃厚である。これらとは対照的に、パリ郊外に点在する第八大学（ヴァンセンヌ）あるいは第十二大学（ヴァレ・ド・マルヌ）は創設から十年あまりと歴史も浅く、それぞれ強烈な個性をもつ新構想大学といわれる。このような十三のパリ大学のなかで、第三（新ソルボンヌ）が言語・文学を、おなじく第九（ドフィニス）が経済・経営を専らとする単科大学である反面、第五は数学・医学・生物学・教育学など、また第八は法律・経済・文学・心理学などを専門課程とし、むしろ総合大学を感じさせる。しかも、宏大なソルボンヌの建物を共有しながら、第一および第四（ソルボンヌ）の双方に哲学の専門課程

が、そして第三と第四の双方に文学の専門課程が見出されという奇妙さである。

そのうえ、教育学の分野における研究体制と人的構成を眺めれば、日本との間には驚くべき相違が存在する。パリ大学で教育学（教育科学）の研究・教育単位を有するところには三つあり、おまかに説明すれば、第五大学は教育哲学・教育史を、第八大学は教育行政・比較教育を、そして第十大学（ナンテール）は教育方法・教育社会学を特色としている。地方で教育学（教育科学）の研究・教育単位をもつのは、カーン大学、ボルドー大学およびグルノーブル第二大学にすぎない。なお、パリ第一大学における哲学の研究・教育単位のなかには教育哲学の講座が含まれ、また高等教育機関のひとつである社会科学高等研究院にも教育学の演習があるとき⁽²⁾。

こうした研究体制から推測できるとおり、フランスにおける教育学の人的構成はかなり稀薄である。そこには教育哲学会も教育史学会も見だされない。とはいえ、パリの国立教育研究所からは教育史の研究者一覧が発行されており、それに付記された研究者の社会的地位と専門分野の調査結果は、大変に興味ぶかい⁽³⁾。

まず研究者の社会的地位であるが、登録された二三二名のうち、高等教育に勤務する者は半分に近い一〇五名。その内訳は教授三二、助教授一〇、講師三五、助手一二、外国人一〇である。

残りの半分は、研究所の所員二三名、古文書官八名、初等・中等教育の教員七三名、学生六名、その他十七名となっている。つきに高等教育および研究所に勤務する一二八名の専門分野をみると、歴史六五名、教育学二十名、社会学十一名、哲学七名、文学四名、法律四名、言語学二名、その他十五名とされ、教育学を専門とする者は十五パーセントに充たない。さらに検討するならば、教育史を研究するこれら二三二名のうち、大学において教育学を担当する教官はわずか十六名にすぎず、その内訳は教授六名、助教授三名、講師四名、助手三名であることが知られる。そして、教育哲学の担当者が、しばしば教育史の研究者をも兼ねる傾向は、日本の場合と同様である。

研究者の現状に関するこうした調査結果は、日仏の間に著しい相違を感じた私の印象を、確認するものと思われる。日本の教育哲学会と教育史学会は、ともに五〇〇以上の会員を擁するが、その大半は教育学者や教育学の大学院生であり、哲学や歴史を専門とする人々が、これらの学会に加入する例は稀である。フランスの実情とは逆に、日本では教育学者に人材が多すぎ、他の分野の研究者には、教育学への関与が少なすぎるともいえよう。

自分の視野を教育の領域だけに限定せず、歴史や文学の授業にも顔をだし、社会の多様な文化活動にまで眼を向けたことは、それほど見当はずれな試みではなかったようである。ヨーロッパに

おけるルソウの全集刊行や記念行事には、教育学者の尽力はほとんど認められないし、輸入されるフランス教育史の書物が、しばしば歴史学者の著作であることは、以前から気がついていた。渡欧してから見聞した国際児童年にちなむいくつかの行事も、かなり貧弱で退屈であった。むしろブローニエの森の『民衆伝統技芸博物館』で、期待もせずに立寄った特別展示『医学と民衆技芸』および『宗教と民衆の伝統』に、私は感銘を受けた。そこでは各時代における出産・飲食物・遊戯、さらにはクリスマス・カテキスム・宗教劇などの豊富な資料が陳列され、青少年の発達と生活が、あらゆる角度から映しだされていたのである。

三

その一年まえルソウ・ヴォルテール没後二百年記念の国際研究集会に参加したとき、私はフランス十八世紀学会の会長であるブラヴァル氏に面会を申し入れ、集会の翌日に自宅に招いて頂いた。氏は、パリ第一大学の哲学教授であり、復刻されたエルヴェシウス全集に長い序文を執筆しておられる。私は在外研究員として滞在するときには、ブラヴァル教授に師事するつもりでいたが、残念にもすぐ翌年に定年退官された。現代のフランスでエルヴェシウスのほとんど唯一の専門研究者であるベッス氏は社会的な要職にあり、指導をお願いするにはあまりにも多忙なのであ

る。

そこで私は当初の計画を改ため、パリ第四大学のポモー教授の授業をまず聴講しようと考えた。氏はヴォルテールの国際的な權威であり、主著『ヴォルテールの宗教』は実証的な労作として定評がある。ポモー教授の担当は十八世紀フランス文学の講座であり、その演習にはデイドロ研究で令名ある中川久定氏やパリ国際大学都市の日本館館長をされた小林善彦氏も参加されたときく。ヨーロッパに出發するまえに中川氏にお会いすると、「出席するなら一般学生むけの講義ではなく、大学院の演習のほうがよいでしょう。一度ぐらゐ日本における研究の現状などについて、話すことを求められるかもしれませんが、私たち年輩の聴講者には、演習の途中で指名して、なにか答えさせることはしないとしたいと思います。」と微笑された。アメリカの大学の授業では、毎週のように多くの文献を消化することを課せられ、非常に負担であると聞いていたので、こうした助言で私の気持はかなり楽になった。

私が大学で聴講することに重点を置いたのは、授業の有様や学生の様子を知りたいからであるが、もうひとつの理由が秘められている。日本の研究者がパリで専門家に面会を求めても、与えられる時間は十五分が普通で、ときには五分ぐらゐという。ブラヴァル氏をはじめ、私が煩わした多くの方々には、丁寧に応対してくださったが、いろいろ考えて訪ねても、挨拶の程度で終ったことも

ある。そして、数年をかけて論文を作成しつつある若い留学生とは異つて、在外研究員には研究が進捗する毎に、面会と指導を求められることも、それほど容易ではない。しかし、授業に出席しておれば、週に一回は顔を合わせるし、いちいち断らないでも、休むことができる。実際に外国における無数の苦勞のなかでも、手紙や電話で日時を打合せ、訪問したり面会することほど、心身を消耗する仕事もすくないのである。

コレージュ・ド・ラ・ソルボンヌを前身とするパリ第四大学は、象牙の塔の風格がもつとも保持されているところときく。ポモー氏は春風駘蕩とした長老教授であるが、整然たる講義の仕方や懇切丁寧な指導に接して、教育者としてもすぐれた能力の持主と感じられた。しかし、その演習には旧制大学の徒第修業を思わせる側面もあり、講師のムナン氏がいつも傍にいて、講義や指導の補佐をされた。

私が聴講したのは、修士課程および博士課程の合同の演習で、その年は文学史の研究方法与學術論文の書きかたが主題となっていた。受講者は二五名ぐらいで、女子学生も多く、外国からの留学生が半数ちかく占めている。彼らが準備している論文の題目を尋ねると、ルソー、マリボー、レスピナス、ロベスピエールに関するものがあり、ムナン氏が現代文学も研究しておられるのとこととで、ポーヴォール、ブルーストを扱うものもあった。文学の

研究といつても、日本で考えるよりも範囲が広く、哲学思潮や政治活動にまで及んでいる。

研究方法と論文執筆に関するポモー氏の講義は、私にとってきわめて有益であった。教授は論文の完成にいたる四つの段階を區別され、①資料の蒐集、②資料の検討、③論文の構成、④論文の執筆、について、それぞれ数回にわたり説明された。まず国立図書館の利用をめぐる一週が費やされ、つぎに専門研究をするための基本文献が教えられた。なかでも重要なものは、フランス十八世紀に関する研究書誌である。研究書誌にもいくつかの種類が出版されているが、これらを併用すれば、研究対象である人物や事柄について、どのような文献が存在するか、を把握することができる。たとえば、ルソーの『告白』や旧制度における女子教育について、どのような原典、翻訳、研究書、雑誌論文、書評が公にされたか、を知りうるのである。第二の段階とされる資料の検討に関しては、文献的な仕事を興味ふかく感じた。原典の校閲や草稿の処理に伴うさまざまな問題について、ヴォルテールやフロベールの作品を例として説明された。

フランスの大学ではこうした研究者への基礎的な訓練が、どの分野でも与えられ、これが終ると、第一線の専門家と同じ水準で探究し、論議することが求められるという。日本では個々の研究者が、出発の時点から孤立し、暗中摸索しながら進むのが普通で

ある。私の経験からしても、フランス啓蒙思想を主要な課題としながら、その時代の著作を理解するには、いかなる辞書や地図や人名辞典がもっとも役立つかすら、ながく気付かないでいた。幾世代の努力を著しうる文献目録や研究書誌が、特定の問題を別として、ほとんど作成されないことは、日本の人文科学および社会科学の憂慮すべき欠陥であらう。

四

教育学の専門課程をもつ大学のなかでは、スニデルス、レオンの両教授を擁するバリ第五が、規模も大きく、もっとも知られている。しかし、第五は留学生の受入れについて配慮が乏しい、と数名の日本人からきいていた。自分が得た感触もそうした印象に近かったので、私はバリ第一大学でウルマン教授の教育哲学演習を受講することにきめた。満足に話しもできず、気の多い在外研究員が、歓迎されないのは当然ともいえるが、勤勉で礼儀ただし日本人を指導したところのある教授は、やはり私たちに好意的である。ウルマン氏とブラヴァル氏に師事された石堂常世さんや谷川多佳子さんと知合ったのは幸運であり、これらの人達の助言がなければ、バリ第一の哲学の研究・教育単位のなかに、教育哲学の講座が含まれることすら、見逃していたであらう。

ウルマン教授の主要な関心は、青少年の調和的な発達という問

題に向けられ、一九六四年に刊行された『自然と教育——体育および徳育における自然の概念』は、道徳・政治科学アカデミーの大賞を受けた名著である。氏の演習の形態は、ポモー教授のそれと非常に相違していた。秋から始まった前期は、教育と他の人間活動、すなわち政治、経済、集団行動、精神分析などとの関連が究明され、二月からの後期には、古代から現代にかけて、いくつかの重要な教育思想が検討された。しかし、ウルマン氏が担当されるのは、全体の企画と四度にわたる概説だけで、大半の週はほかの教官や研究者によって独立した講演が行われる。

演習の後期は典型的な教育思想史と感じられるが、参考までに各週の課題と講演者と列記してみよう。①二月一日 アリストテレス(ティレ) ②二月八日 コメニウス(クロッキイ) ③二月二二日 ラミイ(ポリティス夫人) ④二月二九日 概説Ⅰ(ウルマン) ⑤三月七日 ルソー(ブラヴァル) ⑥三月十四日 ヘーゲル(マッシュレイ) ⑦三月二一日 アラン(ウルマン) ⑧三月二八日 概説Ⅱ(ウルマン) ⑨四月十八日 マルクーゼ(モレル) ⑩四月二五日 概説Ⅳ(ウルマン) ⑪五月二日 概説Ⅳ(ウルマン) ⑫五月九日 教育科学と教育哲学Ⅰ(共同討議) ⑬五月十六日 教育科学と教育哲学Ⅱ(共同討議) これらの講演者は各々の課題についての専門家であり、たとえばマッシュレイ氏はバリ第一の哲学の講師、ブラヴァル氏は退官

された名誉教授。また前期に教育と集団活動の關係を論じられたアルドイノ氏は、パリ第八大学の教授で、産業心理学を担当しておられる。こうした形態は大学院の演習では珍らしくないよう、各大学や各領域の間の交流が日常的になされているといえよう。聴講者も大学院生より、むしろ一般社会人や学校教師の参加が上まわり、時間帯もしばしば夕方や土曜に置かれている。とくに学年の末頃には、平素は受講していない卒業生や国内および国外の専門研究者にも案内がなされ、充実した研究集会や共同討論が催されて、有終の美を飾るのである。

ソルボンヌは単位や学位を取得するため、正規に登録する手続は容易ではないが、授業を受けることは、担当する教授の諒承だけで可能である。日本においても他の学園へ聴講に通ったり、他の研究者の講義を授業のなかに組入れることができれば、私たち教官の啓発されるところ大であろう。しかし、大学間の壁の厚さや、制度上の定めの際しさを考えるとき、私の気持は救いがたい憂鬱に陥るのである。

五

フランスに滞在した一年の間は、異常な物価上昇を別とすれば、特筆すべき動乱や変革が、西ヨーロッパではみられなかった。とはいえ、私の住む国際大学都市では、毎週のようにイラン

革命を支持する大衆集会が開かれ、またシャンゼリゼ大通りに面するソ連航空の支店は、アフガニスタンの問題のため、投石をうけて破壊された。知合った韓国の学生は、激動する祖国の状況に深刻で複雑な反応を示し、演習の途中で姿を消したアラブの青年の背後には、政治問題が潜むとの噂が流れたのである。

大学での授業と会合の帰りに、中世の教会建築や古代ローマの遺蹟の脇を抜けたあと、学生たちの盛り場や地下鉄の通路で、あらゆる人種、言語、容貌、服装の喧騒と雑沓に出逢うのがつねであった。これらの群衆の熱気と迫力のなかに、私は変貌する世界の滔々たる潮流を感じ、さらには人生と青春の限りない多様さを考えた。独善と教条を斥け、「世間 (le monde)」に踏入り、「世間」という大きな書物から学べ、と語るモンテーニュやデカルトの言葉が、同時に「世界」をも意味することを、ここで私は実感したのである。

註

(1) 拙稿、エルヴェシウス——知られざる哲学者への旅路(松島鈞ほか、世界の教育を築いた人びと 第三卷フランス、ぎょうせい、一九八一年刊予定、所収)

(2) フランスにおける大学再編はなお流動的である。とくに昨年七月には、政府から大幅な合理化と実用化の計画が発

表され、騒然たる反響を呼んでいる。これによると教育学の修士・博士課程もいくつかの大学において廃止あるいは縮小される。(Le Monde, le 16 et le 23 juillet, 1980).

(c) Institut National de Recherche Pédagogique, Histoire de l'Education, No. 2-3, avril, 1979.

(愛知教育大学)

教育哲学研究

第 4 3 号

1981

研究討議

教育思想の比較文化的考察

教育思想の比較文化的考察	久木幸男 (1)
日韓教育思想における戦前と戦後	池明観 (8)
自己開発か選抜か	ルーメル, クラウス (14)
比較の指標・基礎文化	武田清子 (19)
研究討議に関する総括的報告	松川成夫 (25)
	長井和雄

論 文

W・ディルタイの「自己省察」 ——W・ディルタイにおける理論・実践関係の理解——	越後哲治 (31)
学校教育における「対話」視点導入の意義 ——対話と教授の両極の全体の教育構造把握のために——	池野正晴 (47)
「読み」の人間学的意味 ——アランの哲学の根底にあるもの——	小林恭 (63)

★ ★ ★

外国学界・教育界の動向

世界教育連盟の国際会議に参加して ——WEFロンドン大会報告——	金子光男 (81)
滞独報告 ——研究交流の深まりを求めて——	長尾十三二 (87)
ソルボンヌ 1979年=1980年	永治日出雄 (93)

書 評

是常正美著『ヘルバルト教育学の研究』	堀内守 (101)
斉藤勉著『デューイの教育的価値論』	杉浦宏 (105)
W・プレツィンカ著『教育科学の基礎概念』	井上坦 (111)
向山洋一著『斎藤喜博を追って』	宇佐美寛 (117)

学会報告

第23回全国大会報告	(124)
------------	-------

<英文摘要>

教育哲学会